

## ＜大会開催報告＞

# 初年次教育学会 第15回大会 開催報告

小西英行  
多摩大学

2020年春からのコロナ禍により、卒業式や入学式の中止や延期など、節目の学校行事への影響はもちろん、ほとんどの教育機関において2020年度の学期開始を延期するなど、教育機関における困難は計り知れないものとなりました。そして多くの教育機関で、それまでほとんど経験したことがない「オンライン授業」の実施に向けて、準備を進める一方、どのようにして対面授業を再開するかを模索した、最初の1年であったと記憶しております。こうした中、多摩大学では、2020年秋学期から全授業で対面(同時オンライン併用のハイブリッド形式)を再開し、2021年度から現在までは、全授業完全対面(ハイブリッドなし)で実施しております。そして、本学の対面授業への熱い思いが、今回、初年次教育学会の対面実施に向け、最も前向きな大学として検討されたものと承知しております。

そうした背景のもと、初年次教育学会第15回大会は、2022年9月5日(月)～6日(火)の2日間、多摩大学多摩キャンパス(東京都多摩市)において、対面開催をメインとし、また対面開催の内容をリアルタイムでそのまま配信するオンライン形式をサブとし、これらを併用したハイブリッド(ハイフレックス)形式として実施致しました。初日は8つの分科会・シンポジウムが企画され、のべ参加者数は、対面が335名、オンラインが60名で、合計395名でした。また2日目は7つの分科会・シンポジウムが企画され、のべ参加者数は、対面が222名、オンラインが44名で、合計266名でした。コロナ禍の開催で不確実な要素が数多くある中、多数の方に参加頂き、誠にありがとうございました。

ところで、今回の開催にあたって、完全対面方式で実施するか、それとも同時オンライン併用型の対面方式で実施するか、この決定にあたって多摩大学では、迷わず後者を選択しました。完全対面で実施するのであれば、ある程度覚悟を持った他の大学でも実施できると思いますが、対面参加者と同時オンライン参加者が、それぞれ一定以上の満足度が得られる形でハイブリッド開催するには、技術的な課題をクリアし、かつハイブリッドでの実践的な経験が十分にあることが求められるでしょう。そこで、次回以降の大会で、ハイブリッド開催を検討する際の参考として、今回本学で実施したハイブリッドの技術的側面を記しておきます。

ハイブリッド形式で実施する場合にまず排除すべきなのは、1)ハウリングです。これにはまず、同じ場所でオンライン参加する際には、必ず発言者以外はミュートにすることです。対面会場で同時にオンライン参加されるケースもあるため、発言者以外のミュートは徹底しなければなりません。次に、2)発表者の発言と、会場での参加者からの発言(発表者とは異なるマイクを利用するケースなど)を、合わせてオンライン参加者にリアルタイムで配信することです。これには、会場の音声システムから直接、会場のPCに直接音声を入力する方法がありますが、これが意外と難しく、会場の音声システムのLINE OUT

などを直接会場の PC に入力すると、多くの場合ハウリングが発生しますので、音声システムに適切なミキシング機能を追加する必要があります(ミキシング機能には追加費用が発生し、学内の音声システム全てにこれを追加するとなれば、かなりの経費が掛かります)。多摩大学では、この方法を取らず、ノイズキャンセリング型マイクシステム(カメラも付随)を利用し、会場の音声システムからの音声の流れるメインスピーカーに、このノイズキャンセリング型マイクシステムを向けて、これから会場の PC への音声入力とします(ノイズキャンセリング型マイクも安くはありませんが、学内のすべての音声システムにミキシング機能を追加するよりもはるかに安く、持ち運びが出来て通常のオンライン会議などでも活用できますし、何よりもミキシング機能がレガシーとなって無駄な投資となることもありません)。会場のメインスピーカーからの音声は、発表者及び会場の参加者の音声の流れ、これをノイズキャンセリングマイクで拾いますので、発表者と会場の参加者からの発言を、確実にオンライン側に配信することができます(2)が実現)。また、次に重要なのは、3) オンライン参加者からの発言が、会場の対面参加者全員にスムーズに伝わることです。会場の PC からは、会場のスクリーンに向けて映像を配信していますが、それに加えて会場の PC を通じて、オンライン参加者の音声も、会場の音声システムから会場の対面参加者全員に配信されることになります。(3)が実現。)ここで心配になるのが、オンライン参加者の音声と、会場の発表者や参加者の音声がハウリングしないかという問題です。いずれも、会場のメインスピーカーから音声の流れていて、これを会場の PC に接続されたノイズキャンセリング型マイクが拾っているため、原理的にはここで無限ループが発生してハウリングが発生する可能性があります。幸い、オンライン配信に利用している Zoom システムの内部で、この部分のノイズキャンセリング機能が働いているようで、結果として対面側、オンライン側の完全な双方向性が確保されました。最後に問題となるのは、4) オンライン参加者の発言の管理です。今回のシステムでは、オンライン参加者はいつでも自分のマイクのミュートを解除して発言すれば、会場のメインスピーカーから音声の流れます。もちろん、オンラインを含めた参加者は、対面会場の司会者の許可なく発言出来ないことにはなりますが、オンライン参加者の発言の求めに対して、対面側の参加者が気付かないケースが多く、結果としてオンライン参加者の不満につながる場合があります。今回のシステムでは、そのようなケースにおいては、オンライン参加者が適切なタイミングで、「発言よろしいですか」などとインタラップすることが可能です。また、本部で全ての会場のオンラインをモニターしていますので、オンライン参加者のチャットへの書き込みなどを適宜確認し、会場参加者に連絡することも実施、オンライン参加者の不安を軽減することが出来ました。少々長くなりましたが、今後ハイブリッド開催を検討することがあれば、是非参考にさせていただけると幸いです。

さて、本大会のテーマは「アフターコロナに向けた高大接続教育—持続可能なプログラム形成に向けて—」としました。現状としましては、アフターコロナとは決して言いきれない状況ではありますが、コロナ禍において様々な工夫された(オンラインを活用した)教育プログラムを活用し、高大接続教育がコロナ禍以前よりも増して、持続可能なものとして展開していくことを願ってということになります。例えば、地理的に離れた高校と大学のキャンパスを、オンラインでつなぐ高大連携プログラムなどは、今後その重要性が増していくものと承知しております。

また、2日間を通じて合計15の企画やシンポジウムが開催されました。その内訳はシンポジウムが大会校企画と課題研究の二つ、ワークショップが合計六つ、ラウンドテーブルが合計二つ、自由研究発表が五つとなります。特に、ワークショップでは、この2年間対面での開催が出来なかった分、各参加者は対面で臨場感のある内容に大いに満足していたようです。また、シンポジウムにおいても、活発な意見が飛び交い、これまた対面での開催による効果ではないかと思っています。

最後になりますが、多摩大学は小規模大学であり、教職員のスタッフは合計10名程度で、学生アルバイトも1桁の人数で実施することになり、なかなか思うように準備が進みませんでした。最後はチームワークで何とか乗り切ることが出来ました。また、大会の成功は、こうしたスタッフの努力に加えて、参加者皆様のご協力があったのことに承知しております。改めまして、15回大会の運営スタッフ及び、全ての参加者の皆様に感謝申し上げます。開催報告とさせていただきます。

(初年次教育学会第15回大会実行委員長)